

松本清張全集 17

松本清張全集

17

文藝春秋

北の詩人

3

象徴の設計

191

小説帝銀事件

353

解説 菊地昌典

486

装帧 伊藤 憲治

北の詩人

いま この

まっ青な鳥は

力なく はばたき

息も 絶えだえに

冷えてゆく胸をいだき

暗い恐怖

絶望の吐息にふるえている

——どこにも道がない

暗黒の谷間で

林和「暗黒の精神」

1

一九四五年の十月、林和はバゴダ広場を過つていた。ソウル（京城）の屋根の上に湖のような空がひろがり、空気が冷たく乾燥していた。地面に砂が舞っている日だった。

今日は身体（からだ）の調子が少し悪い、と林和は歩きながら思った。長い間病氣（びやうき）を持っていると、その日の加減で黴菌（びんじ）の機嫌（きげん）がだいたいわかる。身体が熱く、眼の奥が潤んでいた。

ソウルから日本の軍隊が引き揚げて間もなかったが、降伏と決まったのちに築かれたバリケードが、雨ざらしの残骸（さがい）を見せていた。公園はいろいろな集会に忙しく使われているが、今日は珍しくデモもなかった。バゴダの前に陽を浴びて、悠然（ゆん然）と腰をおろしている人間が多かった。通行者の中にもまだ日本人が混じっている。横の通りにあるヤミ市場から騒ぎが聞こえていた。

林和は誰かに声をかけられたと思ったが、二度目に、はっきりと自分の名を呼ばれた。

「しばらくですわね」

長身の青年が古びたオーバーを着て立っていた。林和はカーキ色の詰襟（じつぎん）を着ている。日本の兵隊が着ていたもので、ラシャ地（らしやぢ）で暖かい。

安永達（やすなが）という男で、林和は労働組合の事務所か何かで二、三回会ったことがある。当人は日本植民地時代から地下に潜っていた労働運動の闘士だった。

「どこに行かれたのですか？」

安永達は、その特徴となっている下がった眉を開いて訊いた。白い歯を見せてにこにこしているのだ。

「朝鮮出版労働組合の結成大会に出席して帰るところです」

林和が答えると、安永達は、ご苦労さま、と言って労を犒（ほう）った。

「一度、あなたとゆっくり話し合いたいと思っていたところですが」彼は人なつこい笑いを見せた。「いつも忙しいときばかり会っているので、ゆっくりとお話もできませんどうです。いま、おひまでしたら、少しその辺を話しながら歩いてみませんか？」

「そうですね」

林和は迷った。熱が出ているので、実は早く家に帰って寝たいところだった。それに、解放以来、寝不足がつづいている。徹夜の疲労も重なっている。しかし、林和としては長い間地下に潜っていた労働運動の闘士安永達と話をするのは悪くない。語りながら歩いているうちには身体（からだ）のけだるい加減も忘れてくるだろうと思った。じつさい、いままでもそういう経験があったし、気分が変わるとあんがい身体（からだ）の調子まで直るものだった。

「歩きましょう」

と、林和は同意して相手と肩を並べた。

「どこに行きますか？」

安永達はちょっと足を動かして訊いた。

「どこでもいいです。ただ歩くだけでいいじゃありませんか。わたしの家に来ていただきたいのだが、なにしろ、汚ないところで」

林和が言うのと、

「いや、そりゃご迷惑だから辞退しましょう。おっしゃるのとおり、ぶらぶら歩き回りましょうか」

安永達はそのときになって初めて林和の顔をまじまじ見た。が、病気とは気づかないらしく、

「ずいぶん元気のいい顔色をしてらっしゃいますね」

と、のぞきこんだ。

「赤くなっていますか」

「ええ。マツコルリ（濁酒）ぐらい一杯あがつたんじゃないですか？」

「わたしの額に手を当ててください」

安永達は冷たい手を林和の額に寄せたが、びっくりした顔をした。

「熱があるようですね。赤いのはそのせいですか？」

「ここが悪いんです」

林和は詰襟の上から胸を叩いた。相手は驚いていた。

「大丈夫ですか？　なんでしたら、このままお別れしてもいいんですが」

「大丈夫です。あなたと話してるうちに直るかもわかりません。もう、長い病気ですから、よく自分でも調子がわか

っているんです。人と話してるほうが病気のためにいいんです」

「ずっと前から悪いんですか？」

「若いときからです」林和は言った。「三四年ごろに日本の特高に捕まりましてね。牢屋に入れられていたとき、無理したんだと思います。それからですよ」

安永達は眉をひそめた。

「ずいぶん苦しめたんでしょうな？」

「いや」

林和は少し狼狽して否定した。その話題に今すぐはいるのを好まなかった。これはもう少し準備がないといけない。しかし、安永達はこんなことを言い出した。

「じっさい、今は、病気をしても寝ていられない時代ですからね。そう言えば、一昨日、ぼくは李允宰、韓澄雨両先生の追悼式に参加しましたよ。ほら、咸興で獄死した李允宰先生ですよ。天道教講堂で行なわれましたがね。あなたは行かれませんでしたか？」

「あいにくと」林和は答えた。「出版労働組合の結成準備にかかっていました」

「なるほど、あなたは朝鮮文学建設本部の指導者でしたね。出版労働者とは切っても切れない間ですね」

「お互いに忙しい身体です」

「いや、天道教講堂に行つて独立運動のために犠牲になられた両先生の肖像を見たら、泣かされましたよ。もう少し

生かしてあげて、今日の解放朝鮮を見てもらえばよかった。あなたも身体だけは大事にしてください。文化方面には、あなたなんか第一線で働いていただかなければならないんですから」

「どうも」

林和は顔を赧^かめた。

二人は坂道を上^あっていた。人間は用のないときに歩くと、つい、高い所に上^あってみたくなるものらしい。この道の両側は、解放前には日本人の役人が住宅を構えていた。ソウルの市街を海とすると、この高台から北漢山が真向かいなのである。その住宅街も、今はほとんどが同胞のものになっている。石段に片膝立てた老爺が一人、長い煙管^{パイプ}を唇の先から伸ばして、坂道を上る二人を見送った。

「あなたは詩をお書きになるそうですね？」

安永達は尋ねた。

「いや……へたくそな詩です」

「いやいや。わたしなんかそういう方面はさっぱりですが」安永達は、いかにも労働者上がりといった厚い肩をひとゆすりして言った。「これからはわが人民に情操^{じょうさう}的にも新しい魂を吹き込まねばなりません。ただスローガンの印刷物や、演説だけでは不満足ですからね。やはり文学から直接に心に訴えたほうが早いです。一度、あなたの詩を拝見したいものです」

「いづれ機会がありましたら」

「どこかにご発表になっていますか？」

「いや、旧いものは残^{のこ}っていませんが」林和はそこを早口で言った。「今度やっと、金南天、李源朝、李泰俊君などといっしょに、ガリ版ですが、『前進』という雑誌を出しました。それに一編載せましたから、お見せしましょう」

「ほう。ずいぶんお友だちもいらつしやるわけですね？」

「金南天君や李源朝君などは純文学者です」と、林和はこの文学にあまり詳しくない安永達に説明した。「彼らは今まで、プロレタリア文学にあまり興味を持っていまいませんでした。文学は芸術のためにのみ奉仕するものだと言っていました。日帝（日本帝国主義）時代にも彼らはブチブル的な文学論を展開し、正しいイデオロギーを持ちませんでした」「そりゃいけない」安永達は顔をしかめた。「そりゃブルジョア芸術です」

「おっしゃるとおりです。もともと、その中の金南天君は、前にはカッパの作家でしたが、日帝の弾圧を受けて獄中で転向しました。それ以来、彼はすっかりプロ文学とは手を切り、自分のことと、自分の周辺に起こった婦人関係のくだらないことばかり書いています。彼は、それを純文学と心得ていました」

「実にくだらんですな」

安永達は唾^{つば}を吐いた。唾は地面の乾いた砂に凝結した。

「やっぱり出生は争われませんか。あの男は慶尚南道か北道かの両班^{両班}の家に生まれました。地主です。そこへいくと、

「ぼくは農民の子ですからね」

「血でしょうね。それで、金南天君はあなたの言うことを聞きましたか？」

「聞きました。今ではぼくらの仲間になっています。朝鮮文学建設本部の委員です」

「ここまで言つて林和は、おれは果たして農民の子と言えるだろうか、と自分に訊いた。」

一九〇八年、たしかに馬山の貧農の家に生まれている。

しかし、四、五歳のとき、父親が商売で儲けて小企業をいとなみ、十七歳から十八歳のころまではわりと余裕のある家庭環境の中で育った。一九二一年からソウルの普成中学に在学していたが、そのときから林和は文学に興味を覚え、詩を書きはじめた。

二人は坂を上つて高台に立つた。

一本もない荒削りの岩肌の北漢山が、ぎくしゃくなかたちで前面の距離に聳えていた。陽が鋭い壁に陰影をつけている。その下に白い大きな議事堂まがいの建物があった。元朝鮮総督府で、中央の高い所にアメリカの国旗が翻っている。その下は影のように低く、その底面に屋根が密集し、朝鮮ホテルなどの少し高い建築だけが日向をうけている。

「ここまで来ると風がいつそう強い。」

「身体のはうは大丈夫ですか？」

安永達が心配そうに訊いた。

「大丈夫です。あなたと話してうちに元気が出たようです。熱も下がりましたよ」

林和は微笑を見せた。

「そりゃ結構です。やつぱり気持の持ち方で違ふんですな」と、安永達は言つた。「あなたは文化方面の指導者です。」

今お話に出た金南天君や、李源朝君などのブチブル的な文学者を、ぐんぐん引っぱつてもらうことですか」

「いや、李源朝君などはずっと良くなっています。あの男も金南天君に負けないくらい純文学論者でしたがね。今ではぼくの片腕になっています」

「そういう人は」と、安永達は少し疑わしげな眼で林和を見た。「気をつけないと、途中で挫折しますよ。われわれは日帝時代から独立運動をやつてきているので、骨の髄から鍛えられていますがね。ひよわい連中は、どうかすると日和見主義者になります」

「いや、李泰俊君は大丈夫でしょう。すっかり今までの誤つた文学観念を棄てていますから、ぼくは彼を信じています」

林和はそう言つたが、いま安永達が「われわれ」という言葉を使ったことに多少のひけ目を覚えた。この男は、ずっと地下に潜つて運動してきている。日本の官憲に捕まえられて投獄されたことも一再ではない。その間に脱獄もやつてゐる。

林和には暗い過去がある。それに対する言い訳を彼自身は持っているが、他人にはうかつにしゃべれないことだった。どのような誤解を受けるかわからないので、もう少ししばらくは沈黙が必要だった。

林和の暗い過去というのは、のちに彼が裁判で述べたところによると、次のようなことである。

『——自分は一九二一年より京城市普成中学に在学していたが、そのときから文学に興味を覚え、詩を書きはじめ、一九二六年十二月ごろには李箕永、韓雪野などとともに、一九二五年に朝鮮共産党の影響下に組織されたプロ文学団体であるカップに加入し、一九二八年七月ごろよりはカップ中央委員として活動した。』

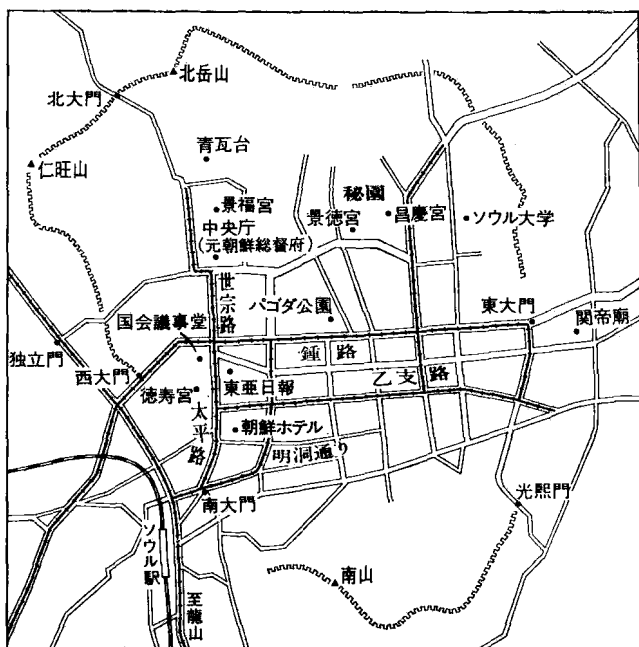
その後、一九三二年四月ごろからは、その書記長として朝鮮文学指導部の一人になった。このように活動してきたところ、一九三四年四月と五月に、日本警察の弾圧で、自分とともに活動していたカップの指導者であった韓雪野、李箕永をはじめとする幹部たちが全羅北道において検挙された。このとき、自分も検挙されたが、病中であったので、これから自分に加えられる日本官憲の弾圧に恐怖を抱いた。文学者はいつの世にも作品を書いて生きてゆけばいいと思ひ、かえってこれを機会に立とうと思った。

一九三五年六月下旬ごろには、京畿道警察部主任であった日本人警部齋賀と京城市新設町にある寺院で会った。そ

のとき、彼は自分にカップを解散させる意志があるかどうかを尋ねたので、自分は前記のような思想的企図をもって、齋賀に自分が署名したカップ解散の宣言書を提出した。その後、プロ文学の階級的立場を離れ、純粹文学を主張した。すなわち、一九三五年八月ごろより一九三七年九月初旬ごろまで、慶尚南道馬山市の自分の妻の宅にて病氣を治療し、一九三七年九月中旬ごろ、京城にふたたび戻ってきて、同年十月ごろより、民族解放闘争で変節した者たちの集団である京城市の保護觀察所に荷担し、いっぽう、金剛企業主である崔南周の資本の下に、「学芸社」を経営してきた。

一九三九年四月ごろには、「学芸社」を代表し、朝鮮總督府図書課の主催で京城府民館食堂で開催された各出版機関代表者と文壇の重要作家たちの会合に参加した。この席上で、龍山に駐屯していた朝鮮軍司令部報道部の代表である鄭少佐の呼びかけで「時局協力」に呼応した。同年六月ごろには、いわゆる「国民総力連盟」の文化部長であった日本人ヤナベと彼の事務所にて会い、約三十分間の相談を行ない、これより朝鮮人文学者たちが時局に協力し、「内鮮一体」の強化と「国民精神」の培養に努力するという決意を表明した。

このときの会談においては、同報道部のカメラマンも参加し、その会談の場面を撮影し、それを雑誌に発表するようにさせ、多くの文壇活動家と朝鮮人民をして日本のため忠実であるよう誘った。一九三九年九月には、「言葉を移



植する」という題目の日本語論文を直接『京城日報』に発表して、朝鮮人作家に日本精神を注ぎ込もうとした。

その後、一九四〇年六月ごろには「朝鮮反共協会」の機

関紙である『反共の友』に、「北韓山脈」または「泰平洞」等の随筆を発表して、読者に反ソ、反共的思想の影響を注入させた。同年六月ごろより一九四二年十二月ごろまでは、ブルジョア映画会社である「高麗映画社」文芸部の囑託として働きながら、一九四二年三月ごろに、朝鮮軍司令部報道部において製作した、朝鮮青年たちを日本帝国主義の兵として出動させる宣伝映画である『キミとボク』の対話を直接校正し、一九四三年一月より一九四四年十二月ごろまで、『朝鮮映画文化研究所』の囑託をしていた。ここでは反動的内容の『朝鮮映画年鑑』および『朝鮮映画発達史』を編集し、朝鮮文学および映画の発達のためにはとうぜん日本と合同するのが正当であることを強調した。――

雲が動いていた。

その加減で下に展がったソウルの市街に斑ができていた。ひと団りの雲の下は暗い穴のようにみえた。林和は、自分の暗い洞穴をみつめていた。

——誰だっただのときは仕方がなかった。肺を侵されていし、監獄にはいれぬ死に決まっていた。しかし、心から日本官憲に屈伏したのではない。あれは見せかけなの

だ。偽装「転向」だ。

おれだけではない。ほかにもいろいろと同じ人間がいる。ただ、彼らはおれほど目立たなかったし、解放後もおれのようにはつきりと起ち上がっていないだけだ。

あの狂人のような日本官憲の弾圧に誰がともに抗し得ただろうか。身体の丈夫な者はいい。いま自分の横にならんでいる安永達のように地下に潜ることもできる。亡命も可能だ。しかし、おれにはそれができなかった。おれだつてもし健康があれば、上海にでも、アメリカにでも逃げられた。

しかし、おれの身体はそういう実践運動には向かないのだ。丈夫だったら、何回投獄されても、おれだつて頑張れた。しかし、死ぬとわかっていて、あの地獄のような日帝の監獄に行けるものか。

試しに、監獄に行った人たちの健康と自分とを置き替えてみるがいい。

「少し寒くなったようですね」安永達が石の上から腰を上げた。「あなたさえ差しつかえなかったら、ここを降りて、もう少し歩いてみましょうか。いや、実はあなたとはもっと話したいんですよ」

林和はそれに賛成だと言った。自分の心の中に開いている黒い穴をのぞかれたくない。いや、それをのぞいているのは自分自身だったが、この労働者出身の闘士と話すこと

でそれを紛らすことができると思った。かえって勇気が湧くかもしれない。

二人は高台から逆に南のほうの降り道をとった。すぐ右下に南大門の反りのある大屋根が見える。林和はこの道が龍山のほうへ向かうことを知っていたし、赤土の切通しが快い散歩道だとかねてから思っていた。今も芒が多い。

安永達は話し出した。今、無数の政党ができてるのは、解放直後の反動ともいえるが、とにかく、勢いのある政党が南朝鮮にひしめいている。その中からわれわれは、将来、真にプロレタリアートのためになりそうな政党を選び、それを育てなければならぬ、それが目下の課題だと思う。

「朝鮮共産党、人民党、韓国民主党、国民党などの代表が集まって、統一戦線問題を協議していますね」と、安永達は言った。「だが、問題はアメリカとの関係です。ぼくは、しだいにアメリカのやり方に朝鮮が歪められてゆくんじゃないかと思えますね」

「すると、そういう方向が見えてるんですか？」

「見えています。林和さん、これはもつとこれから先の方角を見きわめることですね」安永達はそう言うので、ポケットから汚らしい手帳を取り出した。「ぼくは八・一五解放以来の日誌をここにつけています」

林和はのぞいた。そこには鉛筆で小さな字がぎっしり書き込まれてあった。

「ひとつ、その辺にすわって、おもな項目だけを読んでみ

ましようか。そうすると、あなたもわたしの言った意味がわかると思います」

林和の好きな道に来ていた。芒は風に白くゆれている。

ゆるやかな赤土の丘の起伏と、空に伸びたボブラとの間に、黒い低い建物が見えた。元日本軍の火薬庫だったものだが、今はアメリカ軍の倉庫に使用されている。アメリカ兵の歩哨が一人自動小銃を肩にして、所在なげに口を動かして草の上を歩き回っていた。

安永達は腰をおろす場所を捜した。赤土の坂道には人の通行もなかった。草は黄色く枯れている。頸の白い鵲が黒い羽を拡げて飛び立った。

安永達は声を出して、自分の手帳から要項だけというのを読み上げた。

一九四五年八月 △十四日 日本政府ボツダム宣言受諾。△十六日 在京革命者大会を徳成高女講堂にて洪南杓司会の下に開催中、ソ連軍が入城するとの風説で散会。十万余群衆、ソ連軍を迎接すべくソウル駅に殺到。長安ビルで「革命同志」と「出獄同志」等が集合して李英、鄭柏一派を中心に共産党復活協議。全国各刑務所、警察署に拘禁された政治犯全部釈放。△十七日 建國準備委員会発足。臨時治安維持政權体制を着着整備。残留政治犯全部出獄。△二十日 朝鮮共産党再建協議（朴憲永中心）。△二十一日 建國準備委員会、宣言と綱領発表。ソ軍元山に上陸。△二十二日

ソ軍、平壤に進駐。△二十三日 權威ある筋の報によれば、朝鮮が自主独立政府を樹立するまで米ソ兩軍が分割駐屯すると報道。△二十九日 ソ軍開城進駐。△三十日 マ將軍、日本厚木飛行場に到着。

九月 △一日 朝鮮国民党結成（委員長安在鴻）綱領「われらは重慶にある大韓臨時政府を絶対支持する」。在京共産主義熱誠者大会召集。大韓民国臨時政府還國歡迎準備会結成。△六日 大韓民主党、韓国民主党七百余名で発起宣言。全国人民代表者大会、會議形式で召集。人民代表委員五十五名、候補委員二十名、顧問十二名選任。朝鮮人民共和國誕生（於京畿高女講堂）。△八日 ホッジ中將麾下米軍仁川上陸。韓国民主党發議人会で大韓民国臨時政府絶対支持決議。△九日 在朝鮮日軍正式降服調印式。韓国民主党結成。△十日 各政党統一期成準備会結成（李甲成）。△十一日 ホッジ中將、軍の政策を発表。朴憲永の再建共産党、当面闘争目標三項目発表。

林和は耳を澄まして聞いていた。時折り、鵲がおしつづけたような声で啼いてゆく。

「どうです？」と、安永達は眼を据えて林和の顔から反応を確かめるようにした。「アメリカの政策が、最初、われわれが考えているようなものではない方向に向かっていることはわかるでしょう？」

林和にはまだよく納得ができなかった。もしかすると、

この労働者出身の安永達のほうが何かの情報を掴んで正確な判断をしているのかもしれない。

林和は、自分たちがプロレタリア文学だの、舞踊だの音楽だのと言っている間に、実際面から浮き上がっているような動揺を瞬間に覚えた。いつの時代にも、文学者は労働者出身の黨員よりも非現実的で鈍感のようである。

「もし、アメリカがわれわれの民主主義に弾圧を加えるようになった場合、文学者はどうなるんでしょうか？」

安永達には訊いてもはじまらないことだった。しかし、林和の不安は、自分よりも労働者出身の安永達への背の高さを感じたのである。

「あなたは、自分の芸術が大事だと思ってるでしょうね？」
安永達は訊いた。

「文学はぼくの生命です」

「それだったら、アメリカが朝鮮の文学運動をどんなふうにかえているか、はっきり回答を出してくれる人がいますよ」

「……………」

「ちゃんとした朝鮮人で、立派な人です。いま、名前は言えませんがね。この人なら、かなり先のことまで情勢の分析ができます。ぼくもよく話を聞いています。あなたは会ってみる気はありませんか？」

林和は黙った。

「あなたはたしか、音楽家も、舞踊家も、その組織に握っ

ていますね？」

「芸術家はすべてわたしの組織下にあります」

「それだったら、なおさらです。あなたは、まず、正確な情勢判断を持つ必要がある。こりゃああなたの責任ですよ。そうは思いませんか、林和さん？」

「考えてみましょう」

実際はそれは会ってみようという答えと同じ意味だった。率直に回答ができなかったのは、実はこの安永達という男とはそれほど深い知合いでなかったからである。

「ゆっくり考えてください、大事なことから」
と、安永達は急がないが、強い調子で言った。

「あなたに連絡したいときは、どうしたらいいでしょうか？」

林和は訊いた。

「さあ、それは、ちょっと連絡の方法はないでしょうね。

ぼくはいろいろな仕事をやっていますから、時間と場所とが決まっています。不便な身体です」安永達は笑ったが、
「そうだ、そいじゃこうしましょう。あと五日経って、あなたの家にはぼく自身が伺いますよ」

「そりゃ恐縮です」

「なに、ちっともかまいません。お所を聞かしてください。やはり午前中がいいでしょうね？」

「午後だと出かける用事がありますから、午前中のほうが好都合です」

安永達は、ではそうする、と言って、林和といっしょにすわっていた草の上から尻を上げた。

「おや、だいたい顔色の赤いのがさめたようですね」

彼は林和の顔を見て言った。

「そうです、少し直ったようです」

「よかったですな。まあ、身体だけは大事にしてください」

安永達は言わなかったが、林和の顔色は本当は少し蒼ざめていたのだった。

日本敗戦による八・一五解放からこの場面の時点まで、朝鮮はだいた次のような歩き方をしていた。

八月十五日の翌日、朝鮮のすべての刑務所から膨大な数に上る独立運動の闘士たちがいっせいに釈放されたが、解放以前およそ三千を超えるといわれた独立運動の地下組織も表面に戻ってきた。京城では、十七日、民主主義者たちの朝鮮建国準備委員会が作られ、委員長には呂運亨（ユンヘン）が選ばれた。

地方のことをいうと、解放されて十日と経たない間に道府、郡、面から部落に至るまで民衆の手で保安隊が作られた。建国準備委員会というのが名士中心の中央的組織として出発したのにくらべて、これと同時に朝鮮の各層の民主勢力を結集した人民委員会は共産党中心であった。

建国準備委員会は、九月六日に南北各界各層を網羅した千余名からなる全国人民代表者会議を開いた結果、国号を

「朝鮮人民共和国」とすることに決めた。この人民共和国のおもなメンバーは、主席李承晩（イセウワン）、副主席呂運亨（ユンヘン）、國務總理許憲（キムヘン）、内務部長金九（キムグ）、外務部長金奎植（キムグイシク）、軍事部長金元鳳（キムウォン）などで、構成は、国の内外にいたおもな反日分子の名士がほとんど包括されたが、特徴は李承晩、金九、金奎植などの右翼分子まで包含されたことだった。もっとも、このときはまだ李承晩、金九、金奎植などは帰国していなかった。

一方、一九二五年六月に結成された朝鮮共産党は、解放と同時に朴憲永の指導の下に九月十一日再建された。この再建朝鮮共産党の主要な幹部としては、金日成、朴憲永、李承燁（イセウ）、金三龍（キムサムリョン）、崔昌益（チェウチャク）らが選ばれていた。

のちに朴憲永は書いている。

「もし、アメリカ帝国主義者たちが朝鮮の内政に干渉せず、人民の意志を蹂躪（じふ）しなかつたら、とつきの昔朝鮮人民は、いま北朝鮮だけで行なわれているような民主的改革を全朝鮮にわたって実施していようし、また人民政權が南朝鮮にも打ち立てられ、全朝鮮が統一・独立・民主国家となっていたであろう。これはなんら疑う余地のないところである」(朴憲永「祖国の統一と独立をめざす南朝鮮人民の英雄的闘争」)

九月八日仁川に上陸し、九日京城にはいったジョン・R・ホッジ中将の率いるアメリカ軍は、太平洋アメリカ陸軍最高司令官マッカーサー元帥の名で次のような布告を発表した。